

里 館 遺 跡

第 58 次発掘調査報告書

—宅地造成及び共同住宅建築に係る埋蔵文化財調査—

2014年5月16日

工 藤 善 蔵

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成25年度に実施した、盛岡市北天昌寺町10-1、11-1、12-1、16-2、16-3に所在する里館遺跡第58次発掘調査報告書である。
- 2 この調査は工藤善藏氏が実施する宅地造成工事及び共同住宅建設に伴い、対象範囲に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。
- 3 この調査は土地所有者であり、事業主の工藤善藏氏と、盛岡市教育委員会との間に締結された埋蔵文化財に関する協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査と資料整理を実施して報告書を作成・編集した。野外調査から報告書作成にかかる経費は、事業主である工藤善藏氏が支出した。
- 4 本書の執筆・編集は、盛岡市遺跡の学び館室野秀文・鈴木俊輝が分担して行った。
- 5 調査地の平面位置は日本測地系による公共座標第X系座標値を変換した調査座標を用いた。
里館遺跡 調査座標原点 $X - 32,000 \cdot Y + 24,500 \rightarrow RX \pm 0 \cdot RY \pm 0$
- 6 高さは標高値をそのまま用いた。
- 7 遺構記号は次のとおりである。

(1) 城館期 (概ね12世紀～16世紀)

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
橋・柱列跡	SA	掘立柱建物跡	SB	竪穴建物跡	SI
堀・溝	SD	土塁	SF	土坑	SK

(2) 城館期以外

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
竪穴建物跡	RA	土坑	RD	溝	RG

- 8 調査業務のうち空中写真撮影を株式会社タックエンジニアリングに委託した。
- 9 発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から有益な御指導、御助言をいただいた。(五十音順敬称略)
岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、金子佐知子(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)、鈴木弘太(一関市教育委員会)、中野晴久(常滑市歴史民俗資料館)、羽柴直人(岩手県立博物館)、増山植之(田原市教育委員会)、八重壺忠郎(平泉町役場)
- 10 発掘調査による出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

目 次

例 言

目 次

挿図目次 表目次 図版目次

I 遺跡の環境	1
II 調査の経緯	4
III 調査成果	8
IV 総 括	27

挿 図 目 次

第 1 図 里館遺跡位置図	1
第 2 図 里館遺跡全体図	3
第 3 図 第 58 次調査遺構全体図	6~7
第 4 図 縄文時代の遺構と遺物	9
第 5 図 SD509 外溝・SD510 内溝西部、SB510 槽状掘立柱建物跡	10
第 6 図 SD509 外溝・SD510 内溝跡東半部	11
第 7 図 SI504 竪穴建物跡、SD511・512 溝	13
第 8 図 SB504・505・506・507 掘立柱建物跡	14
第 9 図 RB508・SB509・512 掘立柱建物跡	15
第 10 図 SB511・513・514 掘立柱建物跡	16
第 11 図 SB515・516・517・518・519 掘立柱建物跡、SA502 槽跡、SD513 溝	17
第 12 図 SB515~519 掘立柱建物跡、SA502 槽跡、掘立柱跡土層断面図	18
第 13 図 掘立柱跡、SD502 溝、調査区北壁土層断面図	19
第 14 図 柱穴土層断面図 1	20
第 15 図 柱穴土層断面図 2	21
第 16 図 土 坑	22
第 17 図 古代以降の出土遺物	23
第 18 図 里館遺跡西部の遺構	29
第 19 図 里館遺跡の地割	29

表 目 次

第1表	里館遺跡第58次調査遺構一覽表	24
第2表	里館遺跡第58次発掘調査出土遺物一覽表	26
抄 録		31

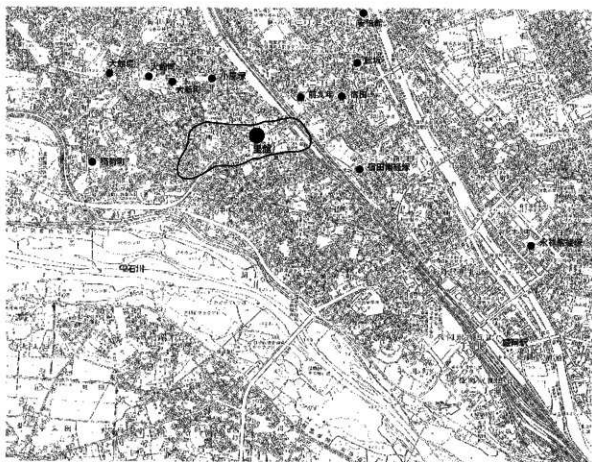
図 版 目 次

第1図版	遺跡全景	第7図版	SI504 竪穴建物跡、SD511 溝
第2図版	調査区全景	第8図版	土坑
第3図版	調査区全景	第9図版	SA502 橋跡、RD009 土坑
第4図版	SD509 外溝、SD510 内溝、SB510 建物跡	第10図版	出土遺物 1
第5図版	SB510 建物跡、SD509 外溝、SD510 内溝	第11図版	出土遺物 2
第6図版	SD509 外溝		

I 遺跡の環境

1 位置と地形

里館遺跡は東北新幹線盛岡駅の北西約2 km、盛岡市天昌寺町、北天昌寺町に所在する遺跡である。これまでに縄文時代、平安時代、中世、近世の遺構・遺物が確認されている。本遺跡から北西19 kmの岩手山（標高2038 m）の火山噴出物で形成された滝沢台地（火山灰砂台地）は、岩手山麓の滝沢市滝沢構沢から盛岡市青山町、大新町、大館町、前九年一・二丁目まで張り出している。台地先端部の前九年二丁目付近は標高140 m前後で、ここからは北上川と雫石川合流点を俯瞰できる。里館遺跡や天昌寺の位置はこの滝沢台地先端部の南西側に、一段低く形成された河岸段丘（砂礫段丘）の南辺部である。標高は130 m～132 m、雫石川河床面との比高は5 m～7 mで、遺跡の南辺は高さ3 m～5 mの段丘崖となっている。



第1図 里館遺跡位置図

2 歴史的環境

本遺跡北側の滝沢台地南辺部には、大館堤遺跡、大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡、前九年遺跡、宿田遺跡、館坂遺跡、安倍館遺跡が並んでおり、これらは縄文時代から古代の集落遺跡である。このうち大館町遺跡では縄文時代中期の集落跡のほか、弥生時代前期の竪穴住居跡も確認されている。古墳時代の遺跡は北夕顔瀬町の宿田南遺跡で北海道系の後北C2d式土器が出土し、安倍館遺跡では滑石製の円盤形模造品が発見されている。また、宿田遺跡には7世紀から9世紀初頭に至る群集墳が形成されており、5世紀ごろの古式土師器と黒曜石製の母指状搔器も出土している。大館町遺跡では7世紀から8世紀の集落跡。大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡では、奈良・平安時代の集落が確認されている。里館遺跡でも第56次調査で平安時代9世紀ごろの竪穴住居跡が確認されている。

この地域は岩手郡の南部に位置し、雫石川の北岸地域は古来野川（栗屋川・栗谷川）と呼ばれてきた。野川は雫石川の古い呼び名であったという伝承もある（『岩手郡誌』）。康平5年（1062）前九年合戦の最後の戦場となった野川橋と堰戸橋については、盛岡市の安倍館遺跡や里館遺跡、大館町遺跡付近が擬定地とされてきた。現在までに橋跡は確定していないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では掘立柱建物跡や竪穴建物跡と11世紀前半ごろの上器群が確認されている。また近年大館町遺跡から11世紀から12世紀の土器やかわかけが出土し、境橋遺跡や上常頭遺跡、宿田遺跡でも11世紀前半ごろの遺構遺物が確認されている。一方安倍館・里館遺跡は中世城館跡であることは明らかであるが、11世紀の安倍氏の構を示す遺構遺物は確認されていない。安倍氏、清原氏の滅亡後、藤原清衡は平泉に拠点を移し、安倍氏、清原氏の基盤を受継いで奥羽西国を統治した。新波郡には藤原一族の鱈爪氏が入り、この地方を所管していた。このころの遺構遺物は館町遺跡、稲荷町遺跡、里館遺跡で確認されており、大館町・大新町遺跡では数条の大溝、稲荷町遺跡は堀で囲まれた居館跡、里館遺跡では大溝と掘立柱建物が確認されている。これらは奥州藤原氏の拠点に関連する遺跡と推定されている⁽¹⁾。

里館遺跡東南の宿田南遺跡では、台地西端部に宿田南経塚があり、妙法蓮華経の礎石経が多数埋納されていた。土器や陶磁器類は出土せず詳しい年代は不明であるが、経文からは中世前半ごろと推定されている。里館遺跡は天昌寺⁽²⁾西側の里館とその内側の勾当館に至る範囲にある。遺跡東半部の里館付近からは主に14世紀、15世紀から16世紀の遺構遺物が集まり、13世紀の遺物も散見される。遺跡西半の勾当館付近では、12世紀以降の堀や溝、12世紀ごろの掘立柱建物や竪穴建物、橋、溝などが確認されているほか、14・15世紀から16世紀の遺物も散見される。一方安倍館遺跡では15世紀から16世紀の遺構遺物が確認されているが、陶磁器の年代から城館の盛時は16世紀代であり、主に16世紀の中ごろから後半にかけて拡大されたことが指摘されている。安倍館遺跡は戦国時代後期の栗谷川城であり、里館遺跡は栗谷川城以前から存在した工藤氏の城館跡と考えられる⁽³⁾。

江戸時代の盛岡藩政下では野川通野川村に属し、盛岡城下から秋田領へ向う秋田街道が雫石川の北岸を通じ、安倍館遺跡の西側を鹿角街道が通じていた。里館遺跡や稲荷町遺跡で確認されている近世の掘立柱建物跡や土坑などは、江戸時代栗谷川村の一部である。

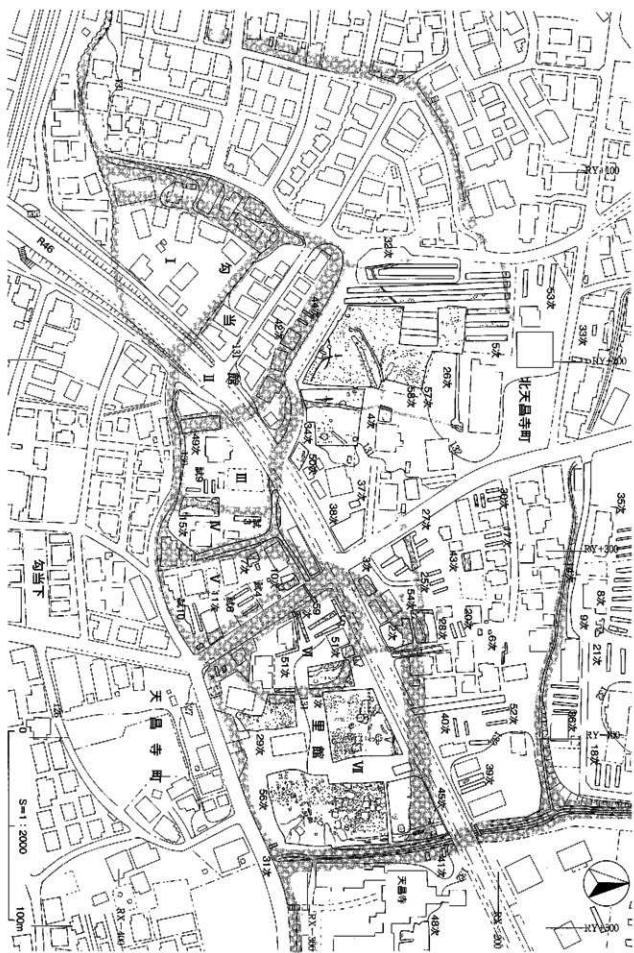


图 2 梁子湖古剎遺址總體圖 (S=1:2000)

II 調査の経過

1 調査経過

平成24年、盛岡市北天昌寺町に在住する工藤善藏氏より、盛岡市北天昌寺町10-1、11-1外土地を宅地造成し、併せて共同住宅2棟を建設すると言う内容で事前協議があった。この場所は埋蔵文化財里館遺跡の北西部にあたる。過去の調査では平安時代末期から中世にかけての遺構、遺物が確認されていたため、事業範囲内にも埋蔵文化財の存在が予測された。

平成25年2月6日、工藤善藏氏より埋蔵文化財発掘届が提出され、同日付で岩手県教育委員会へて進達した。同年2月12日付けで岩手県教育委員会より工事着手前に試掘調査を実施するよう通知があり、同日付で事業主に伝達した。試掘調査は里館遺跡第57次調査として平成25年5月27日から28日に市費により実施した。試掘調査トレンチを南北方向に3条設定し、重機による表土除去ののち、人力による遺構確認を実施した。その結果平安時代末期以後の溝や柱穴等が確認され、開発に先立ち、本発掘調査が必要であることが明らかになった。これに基づき、調査日程や調査範囲、調査費等について事業主と教育委員会の間で協議を重ねた。その結果事業計画範囲のうち、北側2棟の共同住宅と南側宅地造成区画との間に設けられる駐車場部分については、遺構を保存することで本発掘調査の対象から除外することにし、残りの共同住宅2棟と宅地造成部分について本発掘調査を実施することになった。

平成25年9月12日付で発掘届けが提出され、同年9月25日付で岩手県教育委員会より工事着手前に本発掘調査を実施するよう通知があり、同日付で事業主に伝達した。同年10月10日付で事業主工藤善藏氏と盛岡市教育委員会との間で埋蔵文化財に関する協定書を締結。本発掘調査は里館遺跡第58次調査として同年10月15日より調査を開始し、同日付で岩手県教育委員会宛て埋蔵文化財発掘調査着手を報告した。現地調査は平成25年12月26日で終了。以後、遺跡の学び館において発掘調査成果を整理し、平成26年5月16日に作業を終了した。

2 調査要項

- | | |
|-----------|---|
| 1 調査遺跡名 | 里館遺跡 (第58次調査) |
| 2 調査地の所在地 | 盛岡市北天昌寺町10-1・11-1・12-1・16-2・16-3 |
| 3 調査原因 | 宅地造成及び共同住宅の建築 |
| 4 事業主体 | 工藤善藏 |
| 5 調査期間 | 発掘調査 平成25年10月15日～同年12月26日
整理作業 平成26年1月4日～同年5月16日 |

6 調査面積 2,209㎡

7 調査体制

盛岡市教育委員会 教育長 千葉 仁一 教育部長 鷹嘴 徹 教育次長 柴田道明
歴史文化課

○ 事務局

課長兼遺跡の学び館長 袖上寛
課長補佐 木村英樹
学芸主査 岡 聡
文化財主査 権頭祐子
文化財主査 今野公顕
文化財主任 佐々木亮二
学芸員 大沼信忠
主事 寺島幸子
主事補 佐藤美沙
文化財調査員 福島茜
文化財調査員 鳥取邦美
文化財調査員 萱岡雅光
事務委託 齊藤晃大

○ 遺跡の学び館

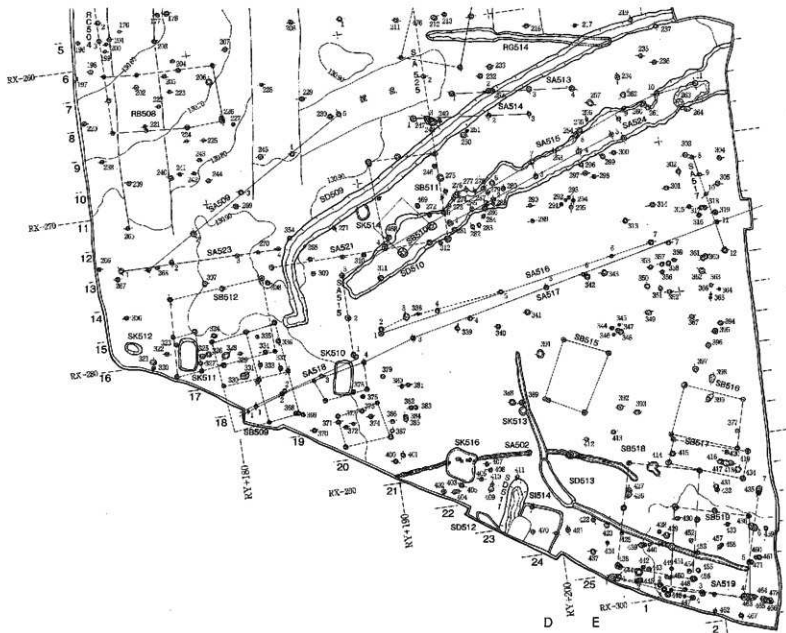
主幹兼遺跡の学び館長補佐 千田和文
文化財主査 室野秀文 (調査担当)
主査 出山淳一
文化財主査 菊地幸裕
文化財主査 津嶋知弘
文化財主査 神原雄一郎
主任 江本敦史
文化財主任 花井正香
文化財調査員 佐々木紀子
文化財調査員 木幡里美
学芸調査員 山岸香澄
学芸調査員 山野友海
文化財調査員 鈴木俊輝 (調査担当)

○ 発掘調査及び整理事業 (五十音順敬称略)

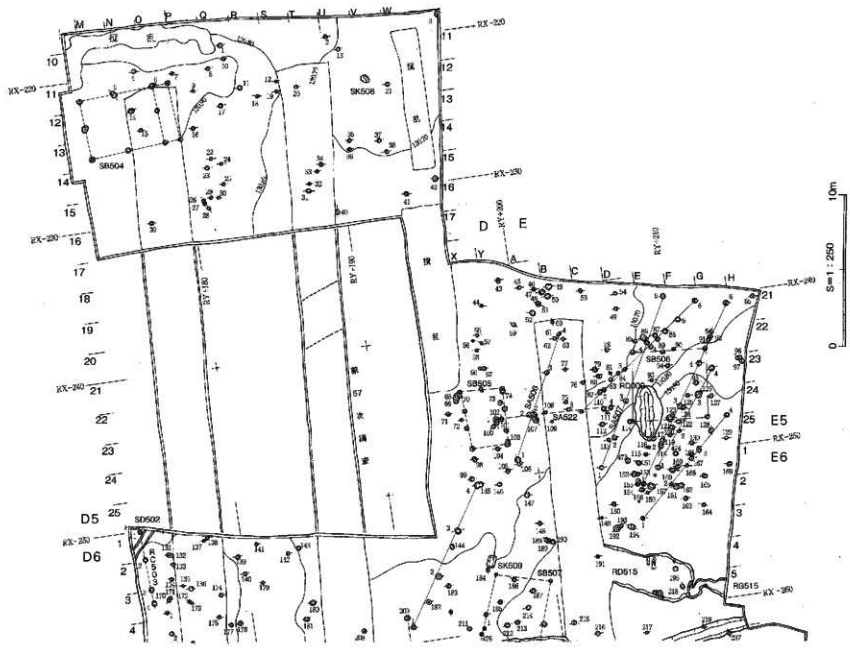
阿部正幸、天沼芳子、嘉糠和男、久慈玲子、熊谷あさ子、小松愛子、佐藤和子、佐藤公一、
佐藤美智子、平縮型、竹花栄子、谷藤貴子、千葉 里子、永沼光子、中村繁子、野中壽、
袴田英治、樋口泰子、日野杉節子、藤原亮子、松岡ふみ子、松本善枝、女鹿麗子、
山本光子

○ 調査協力

株式会社タックエンジニアリング (空中写真) 大和ハウス工業株式会社 北進測量設計株式会社



第3图 第156次調查點全佈圖



(S=1:250)

Ⅲ 調査成果

第58次調査地点は里館遺跡の西部にあたり、遺跡の南側段丘崖から80m～100m北側に位置する。この段丘は河川堆積物の黄灰褐色ないし黄褐色のシルト層で形成されるが、今次調査区ではシルト層の中には被熱して脆くなった礫が散見された。第1次調査や第56次調査地点では、シルト層を2m～3m掘削すると、下部に粘性を帯びた黒色土が堆積しており、この上層から縄文時代中期の土器破片が出土している。また、第56次調査や今次調査では縄文時代の陥し穴状土坑が確認されている。このことからこの段丘面は縄文時代中期から晩明にかけて形成されたことがわかる。

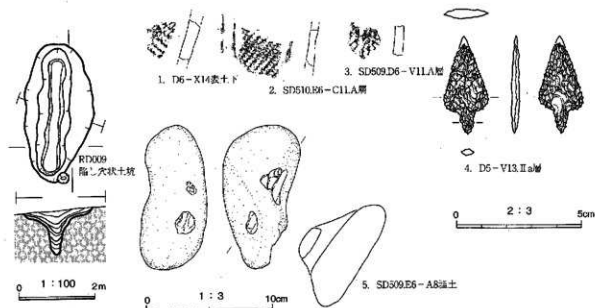
今回の調査区は北側の共同住宅建築2棟と南側宅地造成部分について本発掘調査を実施した。対象範囲のうち、調査区西辺中央部から調査区の北東部にかけて自然低地が存在し、この部分の黄褐色シルト層(Ⅲ層)はゆるやかな低み(第13図)となっており、黒色土ないし黒褐色土が堆積している(Ⅱa層～Ⅱb層)。このうちⅡa層は縄文時代から近世の遺物を包含する。調査区南東部は比較的高く、表土直下は地山の黄褐色シルト層(Ⅲ層)である。調査遺構の主体をなす平安時代末期以後の遺構は、南東部では表土直下の黄褐色シルト層上面に確認され、低地部分ではⅡb層上面より掘り込まれている。また縄文時代の陥し穴状土坑はⅢa層の上面より掘り込まれている。

確認された遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡16棟、溝跡1条、掘立柱列跡22列、溝8条、土坑8基である。第5次、第32次調査で確認されたSD502溝は、今回調査区西端で確認されているが北東部分では大きな攪乱のため確認できなかった。第57次調査(試掘調査)では延長部分に幅2.5mほどの低みが認められたが、溝であるか自然地形であるかは不明である。第58次調査では自然低地の北西部にはSB504掘立柱建物があり、低地の南東部にはSB505・506・507・RB508掘立柱建物跡。調査区南東部の高位部分からはSB509～519掘立柱建物、SE504竪穴建物跡が確認された。南東部高位部分の北西辺にはSD509・510溝が併行しており、その南北には溝に近い方向の掘立柱列跡が存在し、北側の自然低地に沿った掘立柱列跡も存在する。土坑は調査区内に散在。ほかに南東部の竪穴建物や掘立柱建物のあたりを区画するSA502柵やSD513溝も存在する。

1 縄文時代の遺構・遺物(第4図)

調査区北東部のⅢa層上面より長楕円形プランのRA009陥し穴状土坑が確認された。規模等は一覧表に示す。埋土は自然堆積で上部は黒色土主体。下部は黒褐色土と褐色土の混合である。出土遺物は無かった。

縄文時代の遺物は遺構外、または新しい時期の遺構から少量出土している。1は縄文時代前期の羽状縄文土器の破片である。2と3は縄文時代中期の土器破片で、2は隆線文が施される。4はⅡa層から出土した頁岩製の有茎石鏃である。5は孔のある自然石であるが、人為的穿孔ではなく、縄文時代よりも新しい可能性もある。



第4図 縄文時代の遺構と遺物

2 平安時代以降の遺構・遺物

(1) 竪穴建物跡 (第7図・第17図)

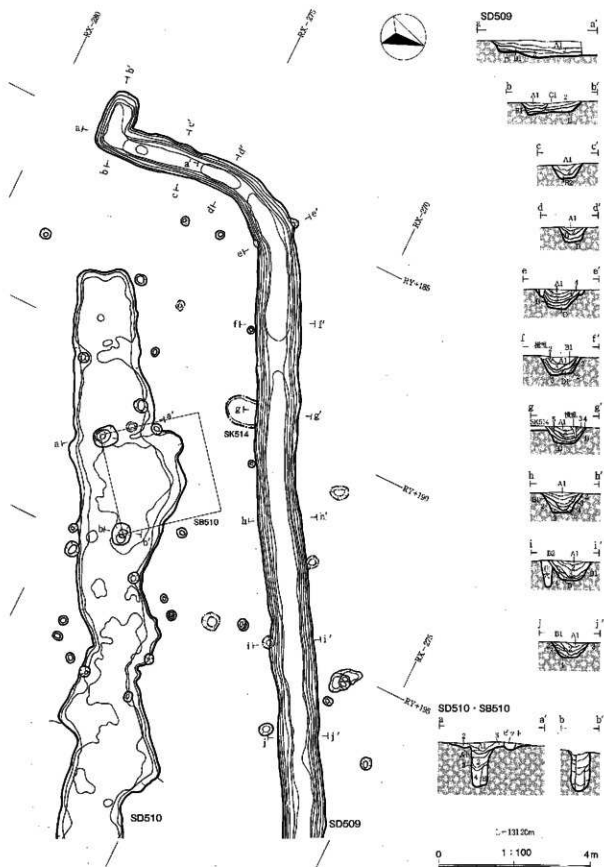
調査区南辺に確認され、SD512溝に西壁を切られ、P470に掘り込まれている。隅丸方形プランの竪穴で、北西から南東には2.83m、南西から北東には2.76m以上の規模である。壁高は28cm～32cmを測る。床面は平坦であるが、搦き固められているような様子は無い。北壁と東壁中央に浅い柱穴が存在するが、本竪穴建物の柱穴ではなく、竪穴に削平された柱穴である。竪穴の裡上はA層とB層が暗褐色土と褐色土の混合土。C層は黒褐色土主体で褐色土粒を混入する。D層は暗褐色土主体で、畑土はすべて人為的に埋め戻されている。

出土遺物はA2層から第17図3のロクロかわらけが出土している。

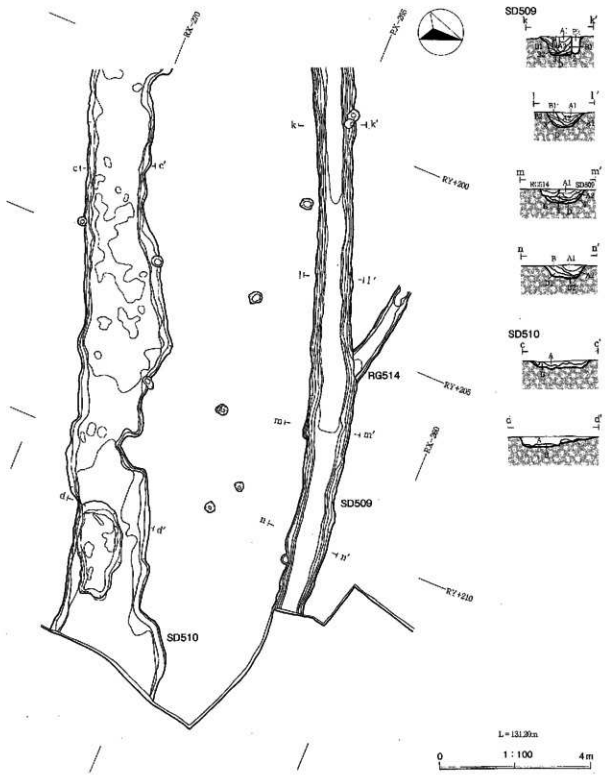
(2) 掘立柱建物跡、柱列跡、橋跡 (第3図・第5図・第8図～第15図)

調査区全体から掘立柱建物跡 (以下建物跡と呼ぶ) や掘立柱列跡 (以下柱列跡と呼ぶ) のほか478個の柱穴が確認された。調査区北西部は他と比べて柱穴分布密度が希薄である。

建物跡は比較的小形の建物で、身舎が1間×1間 (SB510、513、514、515、516、517)、1間×2間 (SB506、507、RB508、SB518)、2間×2間 (SB504、509、519)、2間×3間 (SB505、508、511、512) がある。2間×2間の建物のうちSB504掘立柱建物跡は身舎の東妻に廂、または縁が付き、SB509建物跡は総柱建物である。また2間×3間建物のSB512建物跡は南西隅に1間×1間の間仕切りがあり、内部にSK511土坑が存在する。1間×1間の建物跡のうち、SB513、514建物跡は、SA516、517柱列跡との位置関係から門の可能性がある。さらにSB510建物は、SD510溝の底面に大形柱穴2口のみ確認された。この建物はSD509、510溝との位置関係から、両溝の間に存在した土塁に伴う櫓状建物と推定される。建物跡のうち、SB511建物跡はSD509、510溝に先行する建物であり、RB508建物跡は出土遺物から近世の建物跡である。



第5圖 SD509外溝・SD510內溝西半部、SB510橢狀獨立柱建物跡



第6圖 SD509外溝・SD510内溝跡東半部

柱列跡は南西から北東方向に並び柱列跡 (SA505～512)、東内または南北方向の柱列跡 (SA503、RC504、513、514、521、522、525)、SD509、510 溝に近似する方向の柱列跡 (SA515、516、517、524)、北西から南東方向に並び柱列跡 (SA519、520) が存在する。このうち SA513 柱列跡は SD509 溝の埋土を掘り込んでおり、SA514 柱列跡、SD514 溝と併行している。

SA502 欄跡は布掘溝内に欄木が間断なく並び、SA513 は SD509 の埋土を掘り込んでおり、SA514 柱列跡、SD514 溝と併行している。

(3) 溝 (第3図・第5図～第7図・第11図・第13図・第17図)

8条の溝のうち、SD502溝は西側の第5次調査及び第32次調査で確認されていた溝の延長部分である。SD503溝は調査区南東部に位置し、SA502欄跡の布掘溝やSD519掘立柱建物跡の柱穴を切っている。SD511、512溝は調査区南側に延びる溝の一部で、SD511溝はSD512溝とS1504堅穴建物よりも新しい。SD509外溝、SD510内溝以外の溝は表1-6を参照されたい。

SD509外溝は断面が逆台形の整った溝で、後述するSD510内溝と併行する溝である。SD509外溝の西端部は、SD510内溝の西端部を包み込むように曲折して終息している。SD509外溝の埋土は自然堆積でA層は黒色土主体、B層は黒褐色土に暗褐色土が混入、C層、D層は黒色土ないし黒褐色土主体で暗褐色土や褐色土の粒や塊が多く混入している。土層は溝の両側から流入しているが、B層、C層は南側から多く流入している。埋土のA層からC層にかけて、かわらけ破片(第17図1、7、8、10)や須恵器系の甕破片(第17図12)が出土している。また、埋土中から径6cmから15cmの自然石が46個出土している。

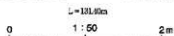
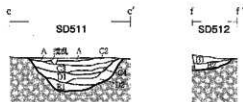
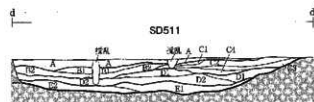
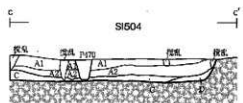
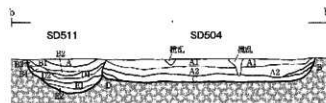
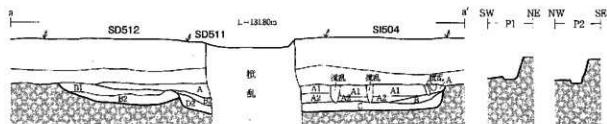
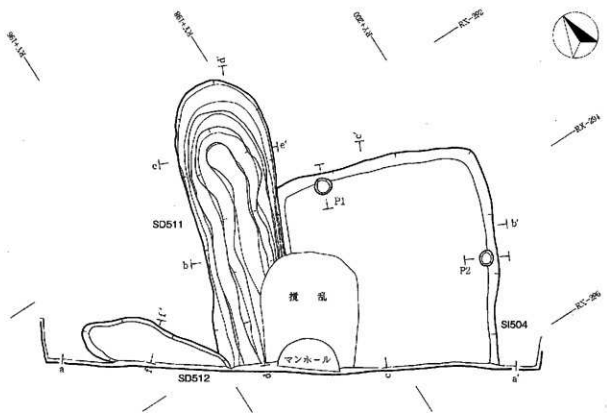
SD510内溝はSD509外溝の両側25m～45mの距離をおいて併行する溝で、平面形、断面形ともに凹凸が著しく、埋土と遺構の壁や底面との境が不明瞭などところがある。土取用の溝であろう。埋土はA層とB層に大別され、A層は黒色土ないし黒褐色土に暗褐色土、褐色土が混入し、B層は暗褐色土と褐色土、黒褐色土の混合土である。

(4) 土坑 (第16図)

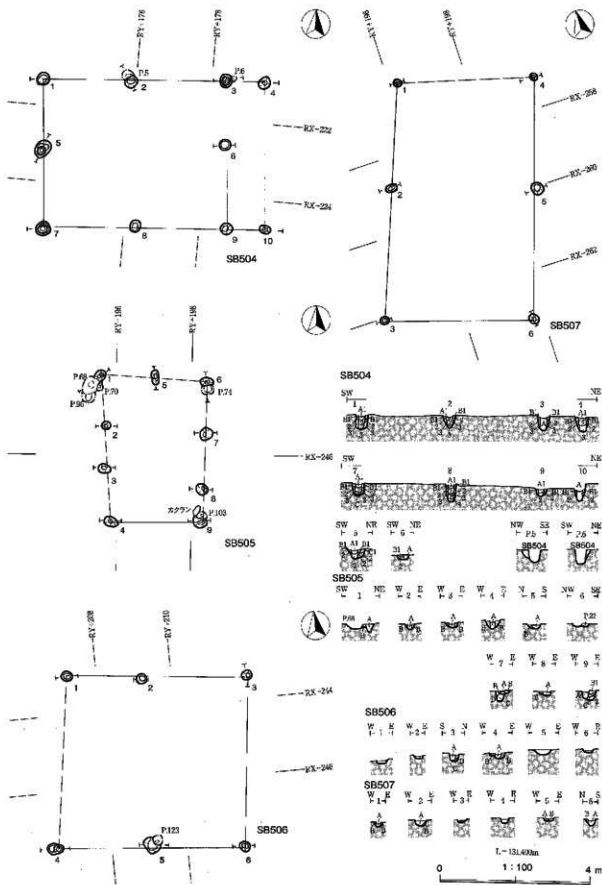
土坑は表1-5を参照されたい。このうちSK510とSK511は隅丸長方形の土坑で、壁は直立し、底面は平坦である。埋土は埋め戻されており、SK511からは土師器甕の破片が出土している。SK511土坑はSB512掘立柱建物の南西隅間仕切内にあり、この建物に伴う可能性がある。SK516は不整形の堅穴様の土坑。SK509は小形の長方形プランの土坑である。

(5) 出土遺物 (第17図)

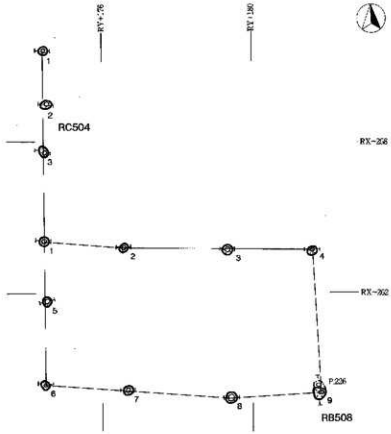
第17図1～10はかわらけである。このうち1～6はロクロかわらけ、7～10は手捏かわらけである。12世紀後半の製品である。11は土師器系の掛ね鉢の底部破片で、東海地方の製品である。付高台で底部内面が磨滅している。12は須恵器系の甕の体部破片である。内面は同心円状当て具、外面は細かな斜行状のタタキである。13は中国染付皿の口縁部。14は中国白磁の口縁部、15は中国青磁皿の底部破片で、内面にスタンプがある。13～15は15世紀から15世紀の製品である。16は瓦質の甕か手炙りの破片。17は灰釉の土瓶口縁部である。18、19は摺鉢の破片。20は肥前の染付碗、21は肥前の染付皿の底部である。22は寛永通寶の寛文銭である。



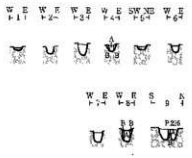
第7図 SI504竪穴建物跡・SD511・512溝



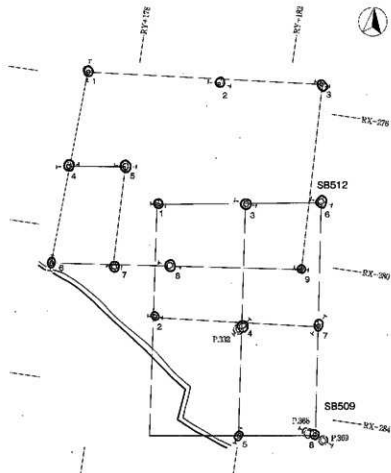
第8図 SB504・505・506・507独立柱建物跡



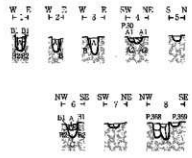
SB508



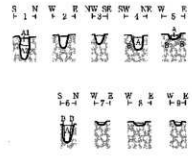
SA504



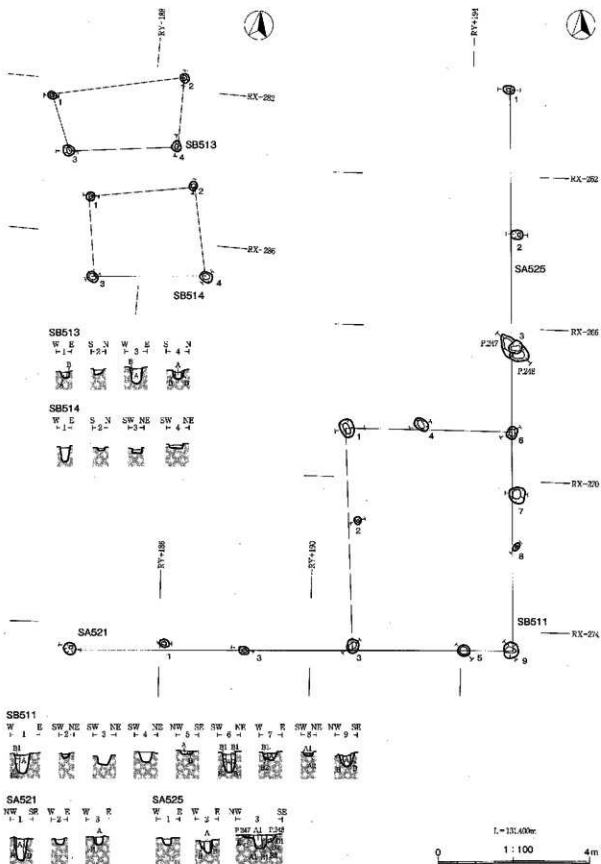
SB509



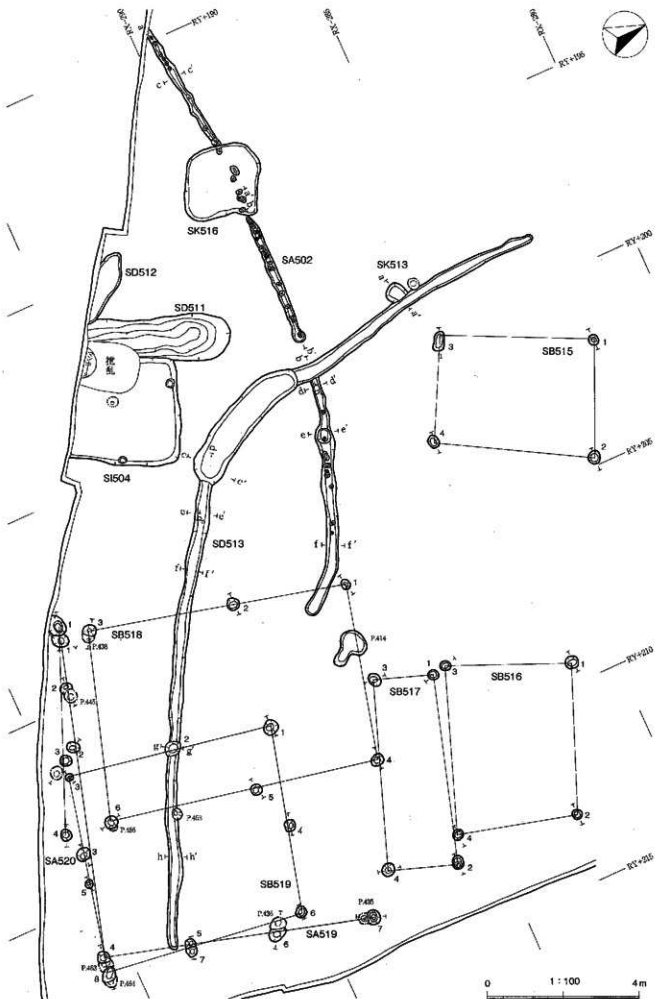
SB512



第9圖 RB508・SB509・512掘立柱建物跡



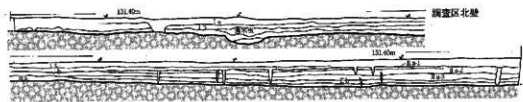
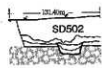
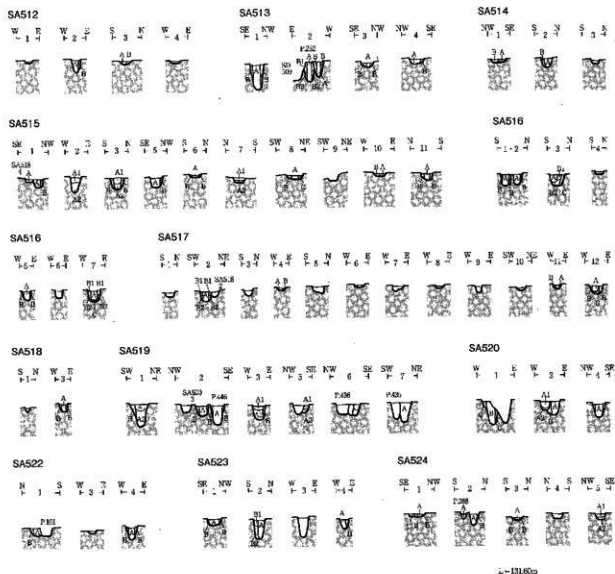
第10圖 SB511・513・514獨立柱建物跡



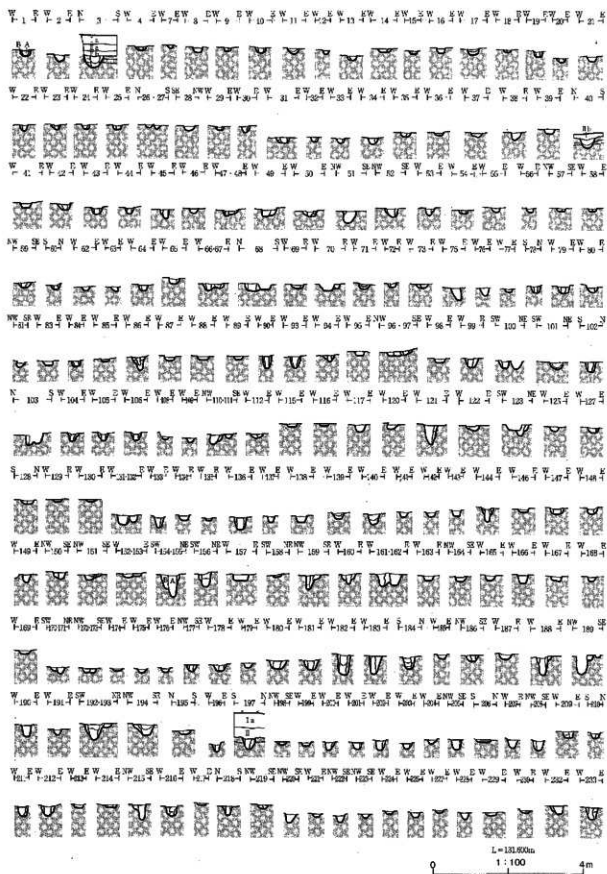
第11圖 SB515・516・517・518・519竪立柱建物跡、SA502欄跡、SD513溝



第12圖 SB515~519掘立柱建物跡、SA502橢跡、掘立柱列跡土層断面圖



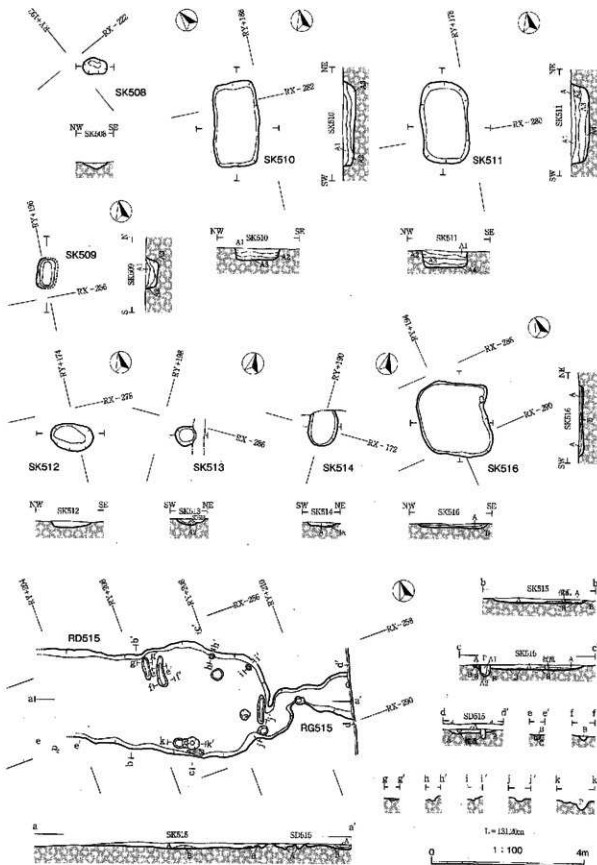
第13图 掘立柱列跡、SD502溝、調査区北壁土層断面図



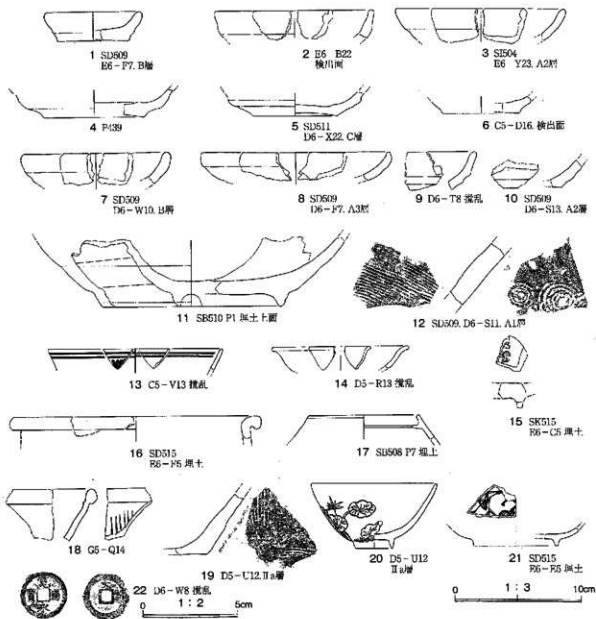
第14圖 柱穴土層断面圖1



第15图 柱穴土层断面图2



第16圖 土坑



第17図 古代以降の出土遺物

第1表 皇館遺跡第58次調査遺構一覧表

1 壁穴建物跡

遺構番号	規模		高さ	プラン	方位	柱穴 床面・基礎	瓦土	壁根関係	時期	出土遺物
	長径	短径								
SS04	2.8以上	2.83	0.28~0.32	隅丸方形	N26°E	柱穴遺跡の北 西25m*	厚1.1	SS51に併せられる	平安時代末	かわらけ

2 竪立柱建物跡

遺構番号	桁行(m)	梁間(m)	高(m)	棟方向	柱間寸法		壁根関係	時期	備考
					桁行(m)	梁間(m)			
SB504 (2層)	5.8 (5.8)	3.65~4.06 (2層)	1.03 (1層)	N84.5°E	2.3~2.436 (2.61尺~3.04尺)	1.69~2.05 (5.6尺~6.77尺)	—	平安時代末期	
SB505	3.85 (3.8)	2.5~2.54 (2層)	—	真北	0.8~1.35 (2.61尺~4.16尺)	1.4 (4.61尺)	—	平安時代末期	
SB506	4.38~4.58 (2層)	4.43~4.52 (1層)	—	N55.5°W	2.66~2.78 (8.77尺~9.08尺)	4.43~4.35 (14.7尺~14.09尺)	SA507, SA517, 318A遺構 と44A併せられる	平安時代末期	
SR507	6.2~6.35 (2層)	3.6~3.93 (1層)	—	N27°E	2.8~3.4 (9.26尺~11.22尺)	3.9~3.6 (13尺~11.9尺)	—	平安時代末期	
SR508	7.1~7.3 (2層)	3.73 (2層)	—	N87.5°W	2.12~2.74 (7.1尺~9.04尺)	1.36~2.17 (5.15尺~7.16尺)	SA503遺構	近世	1.無残片
SB509	6.14 (2層)	4.34 (2層)	—	N7°W	2.87~3.07 (9.47尺~10.8尺)	1.97~2.17 (6.5尺~7.82尺)	SB512, SA517, 318A遺構 と44A併せられる	平安時代末期	
SB510	2.66 (1層)	—	—	N82°E	2.66 (8.8尺)	?	SB511, SA515に重畳	平安時代末	柱の残片
SB511	5.75~5.8 (2層)	4.2~4.4 (2層)	—	N15°W	1.6~2.4 (5.28尺~7.92尺)	1.36~2.2 (5.15尺~7.99尺)	SR510, SA515に重畳し, SB509に併せられる	平安時代末	
SB512	6.2~6.65 (2層)	4.9~5.1 (2層)	—	N84°E	2.7~3.5 (8.9尺~11.55尺)	2.35 (8.42尺)	SB504に重畳し, SR512に 重畳する?	平安時代末期	
SB513	2.85 (1層)	1.5~1.8 (1層)	—	N79°E	(9.4尺)	(3.3尺~5.94尺)	SB510に重畳	平安時代末期	
SB514	2.88~3.0 (1層)	2.1~2.33 (1層)	—	N81°E	(8.5尺~9.8尺)	(6.8尺~7.8尺)	—	平安時代末期	
SB515	4.1~4.3 (1層)	2.85~3.1 (1層)	—	N27°E	(13.5尺~14.2尺)	(11.8尺~10.2尺)	—	平安時代末期	
SB516	3.96~4.1 (1層)	3.34~3.68 (1層)	—	N68°E	(13.1尺~14.6尺)	(11.1尺~12.14尺)	—	平安時代末期	
SB517	3 (1層)	1.8~1.8 (1層)	—	N70°W	(1.65尺)	(5.3尺~5.9尺)	—	平安時代末期	
SB518	6.9~7.22 (2層)	4.7~5.02 (1層)	—	N13.5°E	3~3.9 (9.9尺~12.9尺)	15.5尺~16.65尺 (5.15尺~5.15尺)	SB519に重畳	平安時代末期	
SB519	5.36~5.45 (2層)	4.87~4.9 (2層)	—	N9.5°E	2.85~2.92 (9.75尺~9.3尺)	2.18~2.7 (7.2尺~8.9尺)	SB518に重畳し, SB513に 併せられる	平安時代末期	

3 竪立柱列跡

遺構番号	長さ(m)	柱間寸法(m) (尺×間数)	方 向	壁根関係	時期	備 考
SA503	5.00以上	0.96~2.0 (3.15尺~6.6尺×3間以上)	N 3°W	SB502と重畳	近世?	
RC504	5.00	2.6~2.4 (7.92尺~8.55尺×2間)	N 1°W	SB508と重畳	近世?	
SA505	10.42	2.55~2.76 (10.73尺~12.45尺×3間)	N32.5°E	—	平安時代末期	
SA506	8.82	2.75~3.1 (9.08尺~10.2尺)	N25.5°E	—	平安時代末期	
SA507	12.00	2.1~4.05 (6.93尺~13.57尺×4間)	N28°E	SB506, SA508と重畳	平安時代末期	
SA508	10.50	3.5 (11.55尺×3間)	N53°E	SD506, SA507と重畳	平安時代末期	
SA509	16.20	3.8~4.2 (12.94尺~13.86尺)	N56°E	—	平安時代末期	
SA510	13.10	4.15~5.8 (13.70尺~18.48尺×3間)	N37°E	—	平安時代末期	
SA511	7.50	1.8~3.9 (6.27尺~12.7尺)	N37°E	—	平安時代末期	
SA512	8.96	2.96~3.0 (9.83尺~9.8尺)	N47°E	—	平安時代末期	
SA513	7.88	2.85~2.8 (9.09尺~9.24尺×3間)	N85°W	SB509を覆り込む	近世?	
SA514	7.86	1.84~2.28 (6.07尺~10.02尺×3間)	N85°W	SA513と併行	近世?	
SA515	31.5以上	2.85~4.35 (9.09尺~13.12尺×10間以上)	N69°E	SD510の遺土を覆り込む SD509遺構と併存か?	平安時代末期	西側・東側角削
SA516	18.75	2.85~7.7 (9.21尺~25.1尺×4間)	N79°E	—	平安時代末期	5層~6層か?
SA517	33以上	2.8~4.1 (8.26尺~13.13尺×4間)	N77.5°E	SD513北側壁筋と併存	平安時代末期	SD510の遺土を覆り込む 壁筋か?
SA518	8以上	2.7 (8.91尺×3間以上)	N69°E	SA517と重畳	平安時代末期	
SA519	15.6以上	1.25~2.3 (4.29尺~7.8尺×4間以上)	N72°W	SA530と重畳	平安時代末期	L字跡
SA520	6.2以上	1.62~1.95 (5.28尺~6.41尺×4間以上)	N68°W	SA519と重畳	平安時代末期	
SA521	2.80	1.4 (4.62尺×2間)	N99°E	SB511の壁に併接	近世?	
SA522	9.80	2.726尺~3.83尺 (7.26尺~12.21尺×3間)	N 1°W	S B511東側壁に併接	近世?	
SA523	7.60	2.3~2.8 (7.59尺~9.24尺×3間)	N88°W	—	近世?	
SA524	12.12	2.45~3.32 (8.09尺~11.1尺×4間)	N69°E	SD510の遺土を覆り込む	平安時代末期	
SA525	6.50	1.86~2.6 (4.13尺~6.47尺×4間)	N11.5°W	SA517と重畳	平安時代末期	

4 横 跡

遺構番号	石段溝の規模(m)				掘り方	掘り方	重積関係	時期	出土遺物	備考
	長さ	上幅	下幅	深さ						
SA302	16.4以上	0.25-0.4	0.1-0.2	0.05-0.14	掘跡なく判別か?	SK516, SD612より古い	平安時代末	—	東平山遺構本抜き取りか?	

5 土坑

遺構番号	規模(m)		深さ	プラン	方向	地土	重積関係	時期	備考
	長軸	短軸							
RD009	3.82	1.8	1.2	長溝内形	N6°E	黒色-黒褐色土・下部に黄褐色土	No.117 柱穴に穿られる	縄文時代	
SK508	0.61	0.39	0.14	池門形	N41°W	黒色土主体	—	平安時代末	
SK509	0.78	0.5	0.32	隅丸長方形	N10°E	黒色土主体	—	平安時代末	
SK510	2.18	1.18	0.32	隅丸長方形	N11.5°E	黒褐色土褐色土混合	—	平安時代末	
SK511	2.13	1.34	0.48	隅丸長方形	N8°E	黒色土褐色土混合	—	平安時代末	SH312と共存か?
SK512	1.12	0.7	0.16	池門形	N70°W	黒褐色土主体	—	平安時代末	
SK513	0.52	0.46	0.18	円形	N70°E	黒褐色土主体	S D513に穿られる	平安時代末	
SK514	0.9以上	0.78	0.1	楕円形	N7.5°W	黒褐色土主体	S D509に穿られる	平安時代末	底部の部に灰地層
RD615	6.1以上	2.98	0.13	長楕円形	N65°W	暗灰褐色土主体	S D515と共存	近世	

6 溝

遺構番号	規模				深さ	地土	重積関係	時期	出土遺物	備考
	長さ	上幅	下幅	深さ						
SD502	28.2以上	0.5-0.8	0.4	0.2	0.2	黒色	—	平安時代末		
SD509	26.2以上	0.78-1.2	0.65	0.3-0.68	0.3-0.68	黒色-黒褐色土	S K314を穿る	平安時代末	かわら村	龍三沢遺構から南側に土品?
SD610	20.2以上	1.5-3.2	0.9-2.7	0.2-0.4	0.2-0.4	褐色土・褐色土混合	—	平安時代末		凹凸差しいと取柄
SD611	2.75以上	1.2	0.3	0.6	0.6	褐色土-黒褐色土・褐色土混合	S 1504, SD612を穿る	平安時代末		
SD612	2.2以上	0.65	0.5	0.1	0.1	黒褐色土主体	S D511に穿られる	平安時代末		
SD613	2.3	0.3-0.8	0.25-0.6	0.1-0.3	0.1-0.3	黒褐色土主体	S A502を穿る	平安時代末	かわら村	
RG514	12.18	0.88	0.5-0.6	0.2	0.2	暗灰褐色土主体	S D509を穿る	近世		
RG515	23.8以上	0.36-1.26	0.2-0.9	0.1	0.1	暗灰褐色土主体	S K515と共存	近世		近世陶磁器

第2表 里館遺跡第58次発掘調査出土品物一覧表

品名	クワジ	層位	種別	部位	特徴	年代	遺数	実測図	写真
1 S D509	06-17	H層	ロタロかわらけ(小皿)	口縁部~底面	口縁部外反、非切縁	12C後半	1	17図1	10
2 S D509	06-17	H層	手捏ねかわらけ	口縁部	口縁部内反	12C後半	1	17図7	10
3 S D509	06-17	A3層	ロタロかわらけ	体部	内反	12C後半	1		
4 S D509	06-17	A3層	手捏ねかわらけ	体部	口縁部内反	12C後半	1	17図8	10
5 S D509	06-17	A2層	ロタロかわらけ(大皿)	底面近く	体部内反	12C後半	1	17図10	10
6 S D509	06-17	A2層	手捏ねかわらけ	口縁部	口縁部内反	12C後半	1		
7 S D509	06-11	A1層	栗皮器茶碗器地	体部	内反	12C	1	17図12	10
8 S D509	06-11	A層上部	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		
9 S D509	06-01	A層	ロタロかわらけ	体部	内反	12C	1		
10 S D509	06-01	A層	丁楢ねかわらけ	口縁部	内反	12C後半	1		
11 S D509	06-01	A層	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		
12 S D509	06-01	A層	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		
13 S D509	06-01	A層	穴あき	全	穴あき	特殊土器	1	4066	
14 S D509	06-01	A層	手捏ねかわらけ	口縁部	底平	12C中央~後半	1		
15 S D509	06-01	A層	陶文土器	体部	黒鉛灰陶文土器	大木8b式	1	4070	10
16 S D510	06-01	A層	滑り鉄片			特殊土器	1		
17 S D510	06-01	A層	陶文土器			大木8b式	3	4072	10
18 S D511	06-02	C層	ロタロかわらけ	体部下半~底面	底面内反	12C後半	1	17図5	10
19 S D513	06-02	埴土	ロタロかわらけ	口縁部	内反	12C後半	1		
20 S D513	06-18	埴土	ロタロかわらけ	体部	内反	12C後半	1		
21 S D513	06-02	A2層	自然産		磁石	4			
22 S I 504	06-02	A2層	コタロかわらけ	口縁部	内反	12C後半	1	17図3	10
23 S KE11	06-01	A2層	土器茶碗	体部	内反	平安時代	1		10
24 S B510-1	06-13	埴土上面	安曇瓦製鉢	体部下半~底面	鉢高、体部下半と中央内へツラズ、内面切縁部	12C後半~13C前半	1	17図11	10
25 S H508-17	06-08	埴土	反軸土器	口縁部		12C時代	1	17図17	11
26 穴窯・F139	06-02	B層	ロタロかわらけ	体部下半~底面	底面内反	12C後半	1	17図4	10
27 R D515	06-05	埴土	中国青磁碗	底面付高台	内面切縁部	16C	1	17図15	11
28 R D515	06-05	埴土	肥前産付焼	底面付高台		18C~19C	1	17図21	11
29 R D515	06-05	埴土	瓦葺手摺り	口縁部		18C~19C	1	17図16	11
30 R D515	06-05	埴土	灰質手摺り	体部		18C~19C	1		
31 R D515	06-05	埴土	土器	体部下端		18C~19C	1		
32 磁物包含層	06-13	IIa層	石部		木炭	縄文時代	1	10	
33 磁物包含層	06-11	IIa層	肥前産付焼付焼			18C~19C	1	17図20	11
34 磁物包含層	06-01	IIa層	鉄線土器	体部	内面切縁部	17C~18C	1	17図19	11
35 磁物包含層	06-01	IIa層	肥前産付焼	体部		17C~18C	1		
36	06-18	埴土	丁楢ねかわらけ	体部		12C後半	1		
37	06-01	埴土	ロタロかわらけ	底面		12C後半	1	17図6	10
38	06-01	埴土	磁器茶碗	口縁部		12C	1	17図18	11
39	06-01	埴土	肥前産付焼	体部		17C時代	1		
40	06-13	埴土	中国産付焼	口縁部		15C~16C	1	17図13	11
41	06-13	埴土	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		
42	06-13	埴土	中国産付焼	口縁部	外反、底面切縁部	15C~16C	1	17図14	11
43	06-18	埴土	磁器茶碗	体部	内面切縁部	17C	1		
44	06-18	埴土	ロタロかわらけ	口縁部~体部		12C後半	1	17図9	10
45	06-01	埴土	丁楢ねかわらけ	体部		12C後半	1		
46	06-08	埴土	寛永治寶		寛文銭	17C後半	1	17図22	11
47	06-10	埴土	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		
48	06-18	埴土	丁楢ねかわらけ(小皿)	底面		12C後半	1		
49	06-18	埴土	陶文土器	体部	陶文土器	縄文時代前期	1	4071	10
50	06-10	埴土	肥前産付焼	底面	肥前産付焼	18世紀後半~19世紀	1		
51	06-10	埴土	自然産		磁石	1			
52	06-18	埴土	鉄片		鉄片	1			
53	06-10	埴土	鉄片		鉄片	縄文時代	1		
54	06-18	埴土	手捏ねかわらけ	口縁部	内反	12C後半	1		
55	06-02	埴土	丁楢ねかわらけ	口縁部	内反	12C後半	1	16図22	10
56	06-01	埴土	手捏ねかわらけ	体部		12C後半	1		

Ⅳ 総括

今回の調査では縄文時代から近世に至る遺構と遺物が確認された。縄文時代は前期から中期の土器破片が出土しており、陥し穴状土坑が1基存在する。周辺から石鏃や剥片等が出土していることから、縄文時代中期以後の狩猟の場所であったことがわかる。

平安時代末期の遺構のうち、調査区中央部にはSD509外溝とSD510内溝が併行する。内溝はプラン・断面ともに凹凸の著しい土取の溝であり、両方の溝の間隔や、SD509外溝の堆積土が内側（南側）から多く流入している状況からみて、内外の溝の間には溝の掘削土で構築した土塁が存在した可能性が高い。SD590外溝は南西端で鯉形に曲折して途切れており、南側調査区外に存在する空堀（現状では埋没）との間には虎口を形成する。この外溝南西端から東に9mの位置にSB510楕円建物跡（掘立柱建物跡）が存在する。大形の柱穴2口がSD510内溝内に掘り込まれており、内側から土塁に乗りかかる形で設けられた槽と考えられる(4)。北側の2本の柱は、SD509・510溝の間に存在した土塁上に設置されていたために削平されたと考えられる。SD510内溝の埋没後にはSA515掘立柱列跡が造られ、そのプランはSD509外溝の形状に対応している。この時には土塁やSD509外溝がまだ機能しており、SA515柱列は土塁内側に設けられた残骸の柱列と考えられる。この柱列の西端には2間四方のSB507掘立柱建物が存在するが、その位置から虎口の衛所のような施設であろうか。また新旧関係は把握できなかったが、SA516・517・518柱列はこれらの遺構と近似した方向で存在し、特にSA517掘立柱列は門跡と推定されるSB508掘立柱建物跡を伴う。この南側にも1間四方のSB509掘立柱建物跡が存在する。これらはSD509外溝やSD510内溝や、これに付帯していたであろうSB510掘立柱建物跡、SA515掘立柱列跡、SB507掘立柱建物跡とは、新旧関係は不明ながら時期の異なる遺構であることは間違いない。重要なのはこの場所に一貫して区画施設が設けられていたということである。ここで一旦調査区外に目を転じてみる。

第2図は甲館遺跡の中世城館の縄張を示す。これまでの発掘調査で確認された堀や溝の位置を基準に、藩政時代末期の下厨川村絵図(5)昭和24年(1949)の航空写真(6)から判読される土地区画をもとに復元を試みた。段丘崖に沿って東西400mに渡ってⅠ～Ⅶの7郭が並列しており、里館と呼ばれていたのは東側のⅥとⅦが該当する。寛文8年(1668)の奥州岩手郡栗谷古城図(7)では、里館の西方に勾当館(勾当館)が記されており、その南側の低地はかつて勾当下と呼んでいたという。このことから勾当館というのは第34次調査区と第58次調査区の南側の段丘縁辺部の呼称であったと推定できる。南西端のⅠは大正13年ごろ、国鉄橋場線(現在の秋田新幹線)建設に伴って削り取られて残存しないが、その輪郭は土地区画から復元できる。今回の第58次調査区は西端から二郭目のⅡの北側に位置する。調査区の南側を通じる道路はⅡの北側の空堀に沿い、ⅠとⅡの西側空堀はⅠの西側では幅広く、2列の水田区画により二重堀であったと考えられる。ⅠとⅡは空堀で分割され、東側に略方形のⅢがあり、ⅠからⅢは概ね同一高度であるが、東側のⅣ・Ⅴは順次低くなっている。Ⅰ・Ⅱの西方約80mあたりから西方は緩やかに低くなっており、地形と縄張りからⅠ・Ⅱ・Ⅲあたりが勾当館の主体部分であることは間違いない。一方東側里館の主体部はⅥ・Ⅶと考えられる。中間低位部分のⅣが何れに属するのかはよくわからない。

再び調査区内に戻る。第58次調査東側では、平成4年度に第34次調査が実施されており、南北方向の溝と三間四面の掘立柱建物跡1棟、これに重複する壁穴建物跡1棟2間×1間の掘立柱建物1棟、土

坑、基、柵跡1列が確認されている。このうち南北方向の溝は南端で幅広く深くなって、この南側にある空堀に開口し、流入していたものであろう。四面廂建物や竪穴建物、溝はこの溝や南側の堀と方向を合わせており、遺構の同時性が窺える。また第58次調査のSB513、512、SA519、SF504 竪穴建物跡も南側の堀と併行している。これ等一連の遺構のありかたは、本調査区と調査区外の曲輪との密接な関連性を示すものである。12世紀後半に南側段丘縁辺のⅠ～Ⅱに空堀をめぐらせた曲輪が存在し、北側の後背湿地に面して城館の外郭部分が構築されていた。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがいつから3区画に分割されたのかは明らかではないが、12世紀後半にはⅠ・Ⅱを囲む堀は存在した可能性が高い。SD509溝は北東から南西方向へ開削されて、空堀から20m余りのところで溝の西端がZ字状に曲折する。この堀とSD509・510溝とに囲まれた範囲が、段丘崖付近を主郭とする城館の外郭部であり、内部は溝で数区画に分かれ、それぞれに掘立柱建物や竪穴建物による屋敷が存在したのである。これを構成する溝や、竪穴建物、柱穴などから12世紀後半代のかわけが出土している。ロクロ整形のものと手捏ね整形のものがあり、平泉遺跡群（平泉町）や比爪館跡（紫波町）をはじめとする奥州藤原氏関係遺跡のかわけとも共通する。また壺器系捏ね鉢も概ね同時期のものであるが、東海地方の尾張、三河、遠江のいずれかの窯の製品と考えられる⁽⁹⁾。また珠洲の可能性のある須恵器系壳破片も12世紀代の製品である。

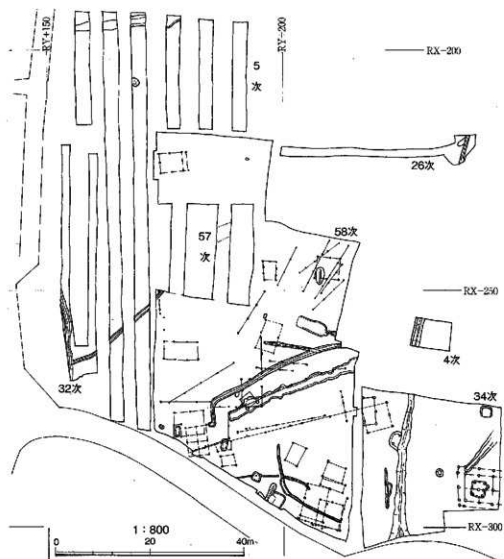
区画・防衛施設は土塁内外の溝であり、これに取り付く槽状建物や棧敷と推定される柱列は、区画であると同時に外敵に対する備えであろう。SD509溝の北側には自然低地に沿って柱列が重複しており、これも防衛のための備えであるのかもしれない。SD509内側の城館内では、かわかけを用いた儀礼行為や宴が催されており、南側の段丘崖近くに存在する城館の外郭部分と考えられる。これまで里館遺跡は安倍館遺跡（粟谷川城跡）とともに中世工藤氏の城館として認識されていたが、今回の調査の結果、平泉藤原氏時代の城館の存在が明確になった。また僅かながら15世紀から16世紀の中国青磁皿、白磁皿、染付皿の破片が散見されるのは、14世紀以後、遺跡東半部を中心とする工藤氏の城館に関連する遺物であろう。このほかに江戸時代の溝や土坑、柱穴があり、寛永通寶や近世陶磁器類が確認されているが、これらは江戸時代下野川村の営みを示す遺構と遺物である。

里館遺跡は1960年代から急速に市街化が進行し、現在では住宅などの小規模調査が多くなっている。広い面積を調査する機会は今が最後になると思われる。この遺跡は安倍館遺跡とともに安倍氏の野川欄・堀戸欄の擬定地であったが、残念ながら今回の調査でも安倍氏時代の遺構遺物は確認できなかった。安倍館遺跡・里館遺跡が中世工藤氏の城館跡であることは、これまでの調査で明らかであるが、今回の調査で奥州藤原氏全盛期の12世紀後半にすでに城館が構築され、その外郭部の構造の一端が明らかになった。地形と地割の検討から、遺跡は西方へ広がりをもつ可能性があり、今後は関連遺構の広がりを念頭に調査を進め、遺跡範囲の確定と内容解明に努めたい。また本遺跡の西方の稲荷町遺跡や大館町遺跡でも12世紀の遺構遺物が確認されている。今後は周辺遺跡の内容とともに、遺跡相互の関連性についても究明されなければならない。

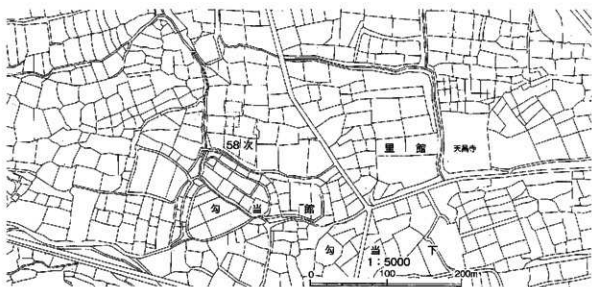
註 (1) 盛岡市遺跡の学び館2012.10【図解、野川欄】第11回企画展図録】

(2) 大昌寺に所在する養測宗寺院。寺仏では安倍氏の時代から野川欄近くに存在した寺院とされている。野川工藤氏の菩提寺である。

(3) 盛岡市教育委員会1999『安倍館遺跡・野川城跡の調査一』。



第18図 里館遺跡西部の遺構



第19図 里館遺跡の地割 (1949年米軍撮影空中写真より判読)

- (4) 迅線や築地線に内側から乗りかかる形式の櫓の遺構は、古代城郭の多賀城跡南辺部築地線の櫓（多賀城跡調査研究所 1971）や弘田横道跡外郭南門西側の石畳に取り付く櫓（弘田横道跡調査研究所 1999）などに類例があり、どちらの遺構も内側の方に柱列が存在する。また中世城館では福島県田村郡三春町の西方館跡（三春町教委 1988）の主郭虎口の櫓門は土塁の南口部に門扉の付く本柱があり、左右の上土内側に門の櫓を支える柱列が存在している。
- (5) 岩手県立図書館収蔵。
- (6) 米軍撮影。国土地理院収蔵。
- (7) 『寛文八年奥州岩手郡栗谷川古城図』（もりおか歴史文化館収蔵）
- (8) この製品について、岩手県立博物館の羽柴直人氏と平泉町役場の八重樫忠郎氏、愛知県田市教育委員会の増山積之氏は常滑の製品で 12 世紀の第 3 四半期のものとした。羽柴氏によれば、半泉遺跡群の出土遺物では常滑に分類してしたものに該当するという。一方、愛知県常滑市歴史民俗資料館の中野晴久氏は常滑の製品ではなく東海地方のいずれかの窯の製品とした。また一関市教育委員会の鈴木弘人氏は常滑の捏ね鉢で年代は 13 世紀に降る可能性有りとした。生産地、年代ともに一定していないが、現段階では 12 世紀後半から 13 世紀前半ごろまでの間の製品としておきたい。

参考文献

- 秋田県教育委員会・秋田県教育庁弘田横道跡調査事務所 1999.3（『弘田横道 II - 区画施設 -』秋田県文化財調査報告書 289 集）
- 三春町教育委員会 1988『西方館跡』
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1971.3（『多賀城跡 - 昭和 45 年度発掘調査報告 -』宮城県多賀城跡調査研究年報 1970）

報告書抄録

ふりがな	さだていせき								
書名	里館遺跡								
副書名	宅地造成及び共同住宅建築に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	室野秀文 鈴木俊輝								
編集機関	盛岡市遺跡の学び館								
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL.019-635-6600								
発行機関	工藤博藏 盛岡市教育委員会								
発行年月日	2014年4月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因		
さだていせき 里館遺跡	岩手県盛岡市 北天昌寺町 10-1・11-1 12-1・16-2・16-3	3201	39° 42' 42.2"	141° 7' 4.3"	2013.10.15 ～ 2013.12.26	2,209	宅地造成及び共同住宅建築		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
里館遺跡 (第58次調査)	城館	平安時代末 ～ 中世	狩猟	縄文時代	陥し穴状土坑	1	縄文土器・石鏃	平安時代末期12世紀後半を主体とする城館の外郭施設と考えられる。中世後期の陶磁器も散見される。	
			平安時代末～近世	集落	近世	堀立柱建物跡	10		ロクロかわらけ
						堀立柱列跡	18		平椀かわらけ
						掃跡	1		瓦器系土ね鉢
						竪穴建物跡	1		中国青磁・白磁・染付
						土坑	7		
	溝跡	6							
			土坑	1	近世陶磁器・寛永通寶				
			溝跡	2					
要約	<p>宇石川北岸段丘上に位置する遺跡北西部の調査。調査区中央部の2条の溝の形状や溝内堆積土のありかから、溝の間に土塁が存在した可能性が高く、これに取り付く櫓状建物跡や複数と推定される柱列跡が体うほか、西端は溝が曲折して虎口を形成している。周辺には低地に沿った柱列跡、堀立建物跡、竪穴建物跡、掃跡が確認されたほか、調査区南側の段丘縁辺部には空堀が削る曲輪が存在している。この曲輪との位置関係や出土土器の年代から、今回の遺構群は12世紀後半の城館外郭施設と考えられる。</p>								



遺跡遺景（南から：背景は岩手山）



遺跡全景（西から）

第2図版



調査区全景 (右が北)



調査区南東部 (右が南)



調査区南東部（北西から）



北側調査区全景

第 4 图版



SD509 外溝、SD510 内溝



SD509 外溝、SD510 内溝



SD509 外溝、SD510 内溝



SB510 櫓状掘立柱建物跡 P1 土層断面 (右上は瓷器系埋ね鉢)



SB510 櫓状掘立柱建物跡 P2 土層断面



SD509 外溝、SD510 内溝 (北西から)

第6図版



SD509 外溝、SD514 土層断面 (西から)



SD509 外溝土層断面 (東から)



SD509 外溝土層断面、かわらけ出土状況



SI504 竪穴建物跡



SD511 溝



SD511 溝かわらけ出土状況

第 8 图版



SK510 土坑



SK511 土坑



SK510 土坑土层断面



SA502 柵跡、SD513 溝 (西から)



SA502 柵跡土層断面 (北から)



RD009 陥し穴状土坑 (北から)

第10図版



出土遺物1 平安時代末期の土器、陶器（外面）



出土遺物1 平安時代末期の土器、陶器（内面）



出土遺物 2 中近世の陶磁器



出土遺物 2 近世の磁器

里館遺跡

—一宅地造成及び共同住宅建築に係る埋蔵文化財調査—
2014年5月16日 発行

編 集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 盛岡市本宮字荒屋13番地1
Tel.019 - 635 - 6600

発 行 工 藤 善 藏 盛岡市教育委員会

印 刷 河北印刷株式会社
〒020-0015 盛岡市本町通2丁目8-7
Tel.019 - 623 - 4256
